Contents

1. 講師紹介
2. 第2回メコン川フィールドワーク実施報告
3. 中学3学年北上川下流域ヨシ刈り体験

講師紹介

ここでは、本校のSGHで継続的にお世話になる講師の先生をお一人ずつ紹介していきます。

よねくら　ひとし
米倉　等　先生

東北大学大学院農学研究科
資源生物科学専攻
資源環境経済学講座
国際開発学分野　教授
（開発経済学、発展途上国の農業開発政策）
http://www.agri.tohoku.ac.jp/agriecon/japanese/seisaku/index-j.html

従来は農業経済学といわれてきた分野を中心に研究していますが、農業では学生を集めにくいとかの理由で、東北大学では資源環境経済学というもってまわった呼び方をしています。国際開発学は、主に発展途上国や新興国と言われる国々や地域を対象として農業や農村の開発と発展の問題を研究する分野です。研究成果はこれらの国々への国際協力政策やプロジェクトと呼ばれる開発事業の推進に貢献しています。そのために、私自身は農業経済学、開発経済学、そして地域研究という３つの研究領域・方法を柱として取り組んでいます。東北大学を定年で退職するところ、今年の４月からは、同大学の教養教育院という別の部署に移ることになり、おかげで引き続き二華の生徒諸君と一緒に研究を続けられる予定です。

高校時代は、いわゆる受験校で、コツコツと一人勉強してましたが、友達もできずまことに寂しい高校生活でした。これではいけないとの気持ちもあって、大学時代には、今では限界集落と言われる長野県の村に毎年のように夏休みを過ごしに行ってました。学生村という企画が長野県の村々にあって、安く学生たちを泊めてくれました。初めて行った昭和４５年には１泊３食付きで確か８５０円でした。学生村での体験が、理工系をやめて農学部で農業経済学を学ぶ決心を促してくれました。今でも付き合いが続く大切な友人も農学部で得られました。今にして、とても大切な学生時代でした。

大学３年の時に偶然取ったのが、フィリピンでの農村調査を紹介する授業でした。こんな研究もあるのかと驚き、自分の知っている日本の村との違い、農業の違いにすっかり虜になりました。それで機会があれば本格的に研究したいと思っていたところ、アジア経済研究所というのがあって近々採用試験があると、親しくなった友人が紹介してくれたので一緒に受験に行きました。競争倍率は２０倍以上ありましたが運よく私だけが受かってしまいました。その後東北大学に移りましたが、今日まで一貫して発展途上国の農業・農村の研究をすることになった次第です。高校から大学にかけては、その後の人生に大きな影響を与える経験をすることが大切だと思います。SGHを通じて、そんなキッカケを皆さんに与えることができればと思っています。

SGH Field Work　平成27年度第2回メコン川フィールドワーク実施報告

＜メコンスクール＞

メコンスクールとは、現地の人が自らの地域の歴史・文化・習慣・環境・生態系について学ぶためにNGOが設立した施設です。私たちはダム建設によるメコン川の生態系の変化や、政府と現地の人々の価値観に大きな溝があり、その問題解決のための具体的な活動などについて、メコンスクールを作ったクーティーさんから話を聞きました。

政府としては経済発展を進めるためにダム建設続けようとしています。しかし、それが原因で魚が回遊できずに種数が減っているという現状に現地の人々は懸念を示しています。政府が現地の人々の意見を耳にする機会を増やしていくことが解決につながると思いました。また問題解決のために、メコンスクールの活動をこれからも続けていくことが重要だと感じました。

＜サーマッキー高校について＞

FW3日目には、タイの北部・チェンライにあるサーマッキー高校を訪問した。サーマッキーの敷地内には中学校と高等学校があり、3700人の生徒が通っている。FWでは、現地の高校生12，3人に対して二華の生徒1人でグループを作り、学校紹介や水問題に関する簡単なディスカッションなどを行った。現地の高校生の中には、日本語や英語を話す生徒もいたが、大半の生徒は母国語であるタイ語しか話すことができず、お互いに言語の壁に苦戦した。

しかし、生徒が積極的に交流しようとしてくれたため、楽しい時間を過ごすことが出来た。また、タイの高校生がどのような生活をおくり、夢や目標を持っているのかなどを知ることができ、とても新鮮で貴重な経験になった。

＜トンレサップ湖＞

私は今回、トンレサップ湖上に浮かぶ浄水場に行ってきました。浄水の工程は特に欠陥が見つかるわけではなく、見せていただいた資料によると細菌類は取り除かれていました。塩素の大量注入による水の酸っぱさという問題も、国が行った水質調査でphが低いことがわかり、phメーターを浄水場の管理者に渡すというように管理はされていました。水の値段は20Lで約50円ととても安かったです。私は浄水場の管理者に話を聞いて、しっかりと住民のことを考えているのだと思いました。また、自分が予想していた以上に飲料水はきれいで日本と水質の違いが出るのは浄化する前の原水が汚いのではないかと思いました。人件費の問題で今の管理者を継いでくれる人はいないようなので、なるべく長い間仕事を頑張ってほしいと思いました。

＜アンコール遺跡＞

12月25日にはアンコールワットとその遺跡群を訪れました。古代に寺院として建てられ、今では世界遺産に認定されているその場所を訪れるのは、私にとっては二度目のことです。夏に行われたＦＷに参加した私は8月にもアンコールワットとその遺跡群を訪れていました。実のところ、二度目の訪問とあってアンコールワット観光にはそれほど期待していませんでした。一度説明を聞いたことがあるからきっと退屈なものになると思っていたからです。しかし、その予想は大きく裏切られました。前回と異なるガイドさんから新しいお話を聞くことができたこと、違うメンバーから生まれる新しい感想や意見を聞けたこと。そのどれもが私の財産になりました。観光や海外旅行など新しい経験を積むのも大切ですが、一度訪れた場所にもう一度足を運ぶことで得られるものに気づかされた瞬間でした。

＜アンコールクラウ村＞

アンコールワットのそばの小さな村である、アンコールクラウ村では6人を2班に分け、2日間で24件に及ぶインタビュー調査を行った。質問内容は家族構成から人々の生活に対する意識調査まで様々な分野に及び、1件当たり約1時間当たりの時間を要した。村にある家は開放的で人々は優しくのんびりとしていた。私たちの突然のインタビュー訪問にも関わらず、誰もが協力的だったのが印象的である。

村でのホームステイでは電気も水道もない日本とは全く違った環境ではあったが、村人たちと火をおこすところから夕食を作ったり、民族楽器の音色に合わせて30分以上踊り続けたりと楽しく充実した時間を過ごした。

これからもＳＧＨ活動の中でアンコールクラウ村との交流を深め、お互いに利益のある関係を築いていけたらと思う。

＜トンレサップ湖＞

トンレサップ湖はカンボジアに位置する東南アジア最大の湖で、メコン川と繋がっている。また、クメール語で「巨大な淡水湖」と「川」という意味がある。多くの住民が、水上に家を建て、船で移動する水上生活をしている。トンレサップ湖には民家の他、小学校やレストラン、浄水場がある。私達は１日で計１３軒の調査を行った。インタビュー調査をするうちに、多くの課題が見えてきた。子どもを陸の学校に通わせたいが、遠くて行けない。ベトナム人の住民との対立がある。政府から立ち退きを要求されるなど、トンレサップ湖には様々な問題がある。厳しい状況下でありながら、急な訪問を快く受け入れ、笑顔を見せてくれたトンレサップ湖の住民に心が温かくなった。私はトンレサップ湖をテーマに論文を作成しているので、次年度の課題研究ではトンレサップ湖の課題解決に貢献できるように研究を進めていきたい。

＜インタビュー調査・水質調査が本格始動＞

今回のメコン川フィールドワークの一番の収穫は、フィールドをトンレサップ湖とアンコールクラウ村に絞り、さらに、インタビュー調査項目と水質調査項目も事前の課題研究ⅡAの授業の中で絞り込んだことです。その結果、インタビュー調査の件数や水質調査の件数ともに４０件以上のデータを得ることができました。

１軒の家庭を調査するのにおおよそ１時間かかります。移動も含め１０日間のフィールドワークの中で、４０時間以上も調査をし続けた、参加生徒の精神面と身体面のタフさには驚かされました。

何か良いアイディアが浮かんだとしても、そのアイディアを現実の世界で生かすためには、現地に赴き自分の足を使って実際に行動することが必要不可欠です。現地に赴き汗水垂らして現地の人々と行動を共にすることで、自分のアイディアに磨きをかけることができます。

そういう経験をしたい人は、ぜひこのフィールドワークに参加してみましょう。

＜出会いが人を変える＞

今回、初めてメコン川フィールドワークの引率としてタイ、カンボジアを訪れました。突然のインタビューにも快く応じてくれて、自分たちの現状を率直に話してくれた人たち。将来の夢を迷いのない目をして答えてくれた子どもたち。そして、様々なことを考え、話し合い、日を追うごとに成長していく生徒たち。そのような光景を間近で見ていて、様々な人たちとの出会いが人を変え、環境が人を育てるのだな、と強く感じました。

自分の目や耳で見聞きしたものはぐっと心に響いてくるものがあります。私自身にとっても、フィールドワークを通して現地に住む人たちの生の声を直接聞くことができたことは何にも代えがたい経験となりました。興味を持った人はぜひ、まずは話を聞きに来て、そしてフィールドワークに参加して欲しいと思います。

中学3年生11名が北上川下流域のヨシ刈り体験に参加しました！

昨年の12月6日(土)に中学3年生11名(男子5名，女子6名)が「岩手県・宮城県：みんなの北上川流域再生プロジェクト　新しい北上川をつくっていこう。」の「第3回：津波で被害を受けた河口の再生をめざして，ヨシ刈りをしよう！」に参加しました。本事業は(株)トヨタマーケティングジャパンが主催で，7月のフィールドワークでお世話になったNPO法人リアスの森が共催，(有)熊谷産業が協力しています。

今年度の中学3学年は昨年7月5日(日)に北上川下流域でのフィールドワークで環境保全の一貫として，ヨシの移植活動を行いました。このときの活動の一部を報告します。

石巻市北上町大須にあるヨシ原で移植のためのヨシを掘り起こし，運搬して植え付けを行いました。

写真 1
掘り起こしたヨシを運搬しました！

写真 2
ヨシを植えました！

作業中は，頑張れば頑張るほど泥に足をとられて，心ならずも泥に身を投じる生徒もおり，移植活動の大変さを体感するとともに，貴重な体験をしました。

午前は「ヨシ刈り体験」に取り組みました。7月の時と異なり，ヨシは約4mまで成長していました。東北工業大学の山田一裕先生から直接ヨシの刈り方と束ね方を教えていただきました。

写真 3
ヨシを刈取り中です！

写真 4
二人で刈り取りました！

写真 5
刈ったヨシを束ねました！

写真 6
最後に全員で
集合写真！

午後に「ヨシを使った門松づくり体験」に取り組んだ後，山田先生からヨシ原再生活動の意義について講演をしていただき，改めてヨシの果たす役割の大きさと環境保全の大切さを実感していました。

写真7　ヨシで作った門松です！

後日，11名から「体験した内容を次年度以降に生かしてもらいたいので，発表の機会を」との申し出があり，3月11日の予餞式後の集会で発表しました。後輩達も熱心に話を聞いており，来年度もこのような活動を後輩達が引き継いでくれると思います。(以下，スライドの一部を掲載します。)